

現場の確認(ルカ 10:1-11)

その信者が本当に救いの恵みが何かわかって、それを正しく知っている信者ならば、その人には感謝が溢れるようになるでしょう。そのときに初めてまだ救われていない人々に視線が行くようになります。それで「現場ってこういうところなんだ。だから、私がここに遣わされているんだ」ということに気づいて現場に目覚めるようになります。救われる以前の私と同じ姿、その現場を見るようになります。救われたことに対して本当の感謝がない人は、まだ自分に囚われているので、現場にいてもその現場が正しく見えてこないのです。そうすると、クリスチャンとしての信仰生活はなかなか難しくなります。困難が終わらないのです。

今日の聖書を見ますと、イエス様が 70 人を別に定めて、イエス様が行くつもり現場に遣わして、現場を確認するようにしました。それが弟子たちを整えて育てていくための訓練の大事な一つの場面です。なぜイエス様は弟子たちをわざわざチームを組んで現場に遣わしたのでしょうか。それは現場がどういうところなのかを確認することによって、残りの人生の自分の目標、人生の方向などがどんなものなのかを確認してしっかりと定めるためなのです。言葉を変えますと、教会に通いながら、信者でありながら、このような現場の確認ができていない場合、残りの人生の方向が定まらなくて、神様とピントが合わなくなります。だから、困難が終わらないし、祈っても祈りがなかなか答えられないし、祈りそのものが間違った祈りに走ってしまうことになってしまいます。なので、クリスチャンとしてこれから信仰生活に勝利するために大切なことは、現場がどういうところなのか、それを正しく確認して、聖霊の導きに従うようになることなのです。ある意味、皆さんそれぞれ信仰生活の経歴、期間が異なるでしょうけれども、何かのモヤモヤがあり、また信仰に対しての葛藤があり、人とのさまざまな揉め事などがいまだに心の中にあるということは、いろいろな理由があるでしょうが、実は現場を確認していないゆえにそうなる可能性があるのです。それほど信者にとって現場の確認ということは、ほぼすべてなのです。今日の礼拝を通してそのことを神様の御声として受けとめて、自分はいろいろ工夫して頑張ったにもかかわらず、イエス様が、神様が一番大切に思っている現場確認に対しては曖昧だったんだなということに気づいて、そちらの方に方向を合わせていただきたいと思います。

イエス様が弟子たちを現場に遣わされました。その現場はどのようなところなのでしょう。何を見て確認して欲しかったのでしょうか。

1. 現場を確認すると正しく祈れるようになる。

まず第一に、信者が現場をしっかりと見て確認すると、祈りが修正されて正しい祈りを捧げるようになります。

イエス様が 2 節でこうおっしゃいました。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい」。現場に収穫が多いこと、しかし、働き手が少ないということに気づかない限り、このような祈りは生まれません。だから何を食べるか飲むかの祈りしかありません。「神様、どうかしてください」。そういう祈りしかできないのです。幼稚な子どもの信仰からなかなか成長しない、そういうクリスチャンになってしまいます。現場を見ると、祈りが変わります。なぜかと言いますと、現場は一言で申し上げると、幸せが全く存在しない現場です。ある人は幸せだなという人もいます。それは偽物の幸せに酔っているだけであって幸せではありません。しかし、ほとんどの人はその偽物の幸せもありません。

1) 疲れている現場

現場は本当に人生に疲れているのです。それを見て確認しないとはいけません。家庭内のさまざまなことで疲れています。また職場の生活、仕事関係等々によって疲れています。そして、対人関係、人間関係などによって皆疲れ果てています。また自分なりに訳も分からないまま、何かの願いと希望などを持っています。そして、周りから期待されるところもあります。それが逆に裏目に出て正しく生きて行かないと、清

くならないという誰が定めたのかわかりませんが、うまくいかなくちゃ、うまくやらずにちゃというルールや期待などが逆にプレッシャーになって、その通りにならないことで疲れている人がほとんどなのです。きりがないでしょうけれども、まとめて申し上げると、生きることにつまずいて疲れているのです。

2) 重荷を負っている現場

疲れているので何もかもが重荷になって、その重荷を負ってふらふらしているのが現場なのです。疲れているからそれが重荷になって、結局、精神的に追い詰められることになり、その影響が神経を通して肉体にさまざまな病を引き起こし、いろいろな事件、事故などに巻き込まれるようになり、これもあれも耐えられないので、別の突破口を見つけようとして依存症の方に走るしかありません。これもあれもダメなので、もう終わりにしようかという思いで自殺を図ったり、人によっては自殺をしてしまう場合もあります。それほど重いのです。特に先進国、日本人の場合は、小さい時からそういうことを表に出してはいけませんという教育を受けて、それが刻印され洗脳されているので、あまり表に現わさないで上手に包装する技術を持っているのです。しかし、中身はそうではありません。それがあまりにも長いので、自分でそのように包装しているかどうかは気づかないほどになっているのです。でも、現場は疲れて重荷を負っているのです。なぜそうなのでしょう。

3) 不可能を知らずにアタック

幸せになれない、問題は解決できない、絶対不可能であることを知らないで、それにアタックして挑戦するわけです。人は正しく生きることができるのでしょうか。幸せになれるのでしょうか。なれないのになろうと思って頑張るから疲れるわけです。大きな岩に生卵をぶつけて、あの岩を粉々にしようとチャレンジするわけです。知らないから。なぜ疲れて重荷を負ってしまうのかさえわかっていないのです。人の本当の問題が何かわかっていないから。だから、他の人、相手を責めたり、自分自身を責めたり、親のせいにしたり、誰かのせいにするのです。知らないから。人は神様を離れて、その途端に悪魔サタンの奴隷となり、自分ではどうにもならない地獄の運命を抱えることになりました。努力によってできるものなのでしょうか。この人の問題を知らないから幸せになろうと、清く生きようと、成功しようと頑張るので、それがぶち当たって疲れて重荷を背負うことになってしまいます。結局、そのようなジレンマの中でどうにか道はないんだろうかと思って、人間が作り出した愚かなものが宗教であり、偶像崇拜であり、またシャーマニズムのようなものであり、さまざまなイデオロギー、思想というものなのです。みな宗教や偶像崇拜、シャーマニズム、イデオロギー思想などに騙されているのです。これが現場なのです。道ではないのに、そこに道があるかのように勘違いしています。勘違いするしかありません。何が問題なのかを知らない限りは、いくらハーバードを卒業したとしても、IT関係で成功してAIを作り出した者であっても、疲れて重荷を負うしかありません。AIはこういうことを知らせることはできないから。これが現場なのです。

4) 飢え渴いているたましい

そして、そのような疲れて重荷を負っている現場に、神様は飢え渴いているたましいを備えていらっしゃいます。つまり、神様はそのような現場を愛して、そこに救いを与えようとしていらっしゃるのです。それがまた現場なのです。飢え渴いているたましいは、そのような疲れて重荷を負う人生の限界を素直に認めることで、正直な質問をすることになります。これもあれもすべてがダメなんだ。なんなのか。どこに答えがあるのだろうか。宗教にはない。人間にもない。愛情にもない。哲学にもない。努力にもない。一体どこに答えがあるのだろうか。と素直に質問するたましいを神様は備えられます。言葉を変えますと、飢え渴いているたましいというのは、今までの疲れて重荷を負っているすべての内容が福音を聞くためのプロセス、旅程に変わるわけです。まことの答え、まことのいのち、福音へとガイドするものになるわけです。そういうたましいを神様は現場にて備えていらっしゃいます。それが現場なのです。そういうことを確認しなさいということで、70人のメンバーを2人ずつチームを組んで現場に遣わされました。

5) サタンの暴れ

同時に、イエス様が弟子たちを送りながらこのようにおっしゃいました。あなたがたを遣わすのは、狼の中に子羊を送るようなことなんだとおっしゃいました。現場は今現在、神の主権の下で空中の権威を持

ち、世の神と言われている悪魔サタンが支配している王国なのです。だから当然そこに光の戦士、伝道者が入ると、サタンが暴れるのは当然でしょう。現場はサタンが暴れるところなのです。そのような内容が今日の読みました聖書の箇所にもいろいろ出てきます。拒否する人間も数多くいるわけです。むしろ伝道者、教会、信者そのものを、福音を持っている信者を迫害して攻撃するところが現場なのです。皆さんをすべてその通りにすんなりと受け入れると思っはいけません。現場はそんなに甘いところではありません。これが現場の確認というところなのです。とにかく福音を真っ正面から拒否する動きがものすごい勢いを帯びて動くところなのです。サタンの国なのです。

6) 福音と伝道者と癒しが必要

そして、現場を確認すると、この現場に他のなにかではなく、福音が絶対に必要なんだ。そして、その福音を伝える働き手、伝道者こそが現場に絶対必要なんだ。そして、今まで疲れて、重荷を負っていたので、彼らに癒しが必要なんだということが確認できるようになります。これがこれからの信者の人生の方向を正しく案内してくれるものになります。勉強することも、自分のタラントを発見してタラントを扱うときにも、結婚するときにも、将来の進路に対しても、もちろん自分の過去のさまざまなことが福音のために伝道者として生きるために全部解釈が変わることになります。また、現場で競争したり、今まで通りに喧嘩したり憎んだり妬んだりというようなことはもう終わりなのです。もちろんあるでしょうけれども、それは私の内側にまだサタンのやぐらが砕かれていないからなんだという戦いであって、現場では癒しが必要だということが確認できたので、生かす者として現場を生きることになります。私は何があっても、どんなに過ちを犯して、大変な犯罪を犯した人間でも、私が扱うことは許すこと以外にはありません。私のような地獄の人間をキリストの血によって赦されたので、許せない人間は存在しないし、社会では法律によって裁かれることが当然でしょうけれども、教会はそういうところではありません。そういうことが確認できるわけです。現場がどういうところなのか。収穫は多いが、働き手は少ない。日本の場合は、話しやすいです。韓国の場合は、教会は多いけれども働き手は少ないと言えますが、日本の場合は教会もない。働き手はもうない。だから、現場を確認したクリスチャン自分自身が最高の主人公として浮かびあがることになります。それが現場の確認です。その人の過去がどうだったのか、今現在の経済の程度、社会的な地位がどうなのかは一切関係ありません。現場に必要な福音をもっている信者。そして、その福音が現場に必要なんだと気づいた伝道者として主人公になります。そのようにこれからの人生を生きて行きなさいという意味で現場に遣わされたわけです。現場を確認すると祈りが変わります。何を食するか、何を飲むかを祈る場合ではないんだと。現場を見たので。どうかあの現場に福音の光が照らされるように。そうすると神様が「どうやって照らすの？人がいないんだから」「私を送ってください。私を遣わしてください」と祈るようになります。「私にはそのような力も能力も何も持っていません。だから、御座の力で私を現場の収穫、たましいを助ける働き手として用いてください」。用いられることもすべて神様の恵みなのです。そちらが頭の中、心の中にパンパンとならないといけけないのに、ほかの何かにぐちゃぐちゃになっていてこの祈りがありません。心配がそんなに多いのでしょうか。なぜ心配が多いのでしょうか。現場を見ていないからではないのでしょうか。

2. 現場を確認すると福音と信者の価値を改めるようになる。

このように現場を確認すると、そのときに今までたくさん耳にタコができるくらい聞いていた福音の絶対価値を改めることになります。そして、その福音を持っている信者、自分の価値を改めることになります。

これが現場確認です。そのときまでは理論なのです。お話を聞いて聖書を見て、あーなるほど、すごいな、ありがたいなという理論なのです。そのすごいことをどこに使うつもりでしょうか。聖霊が宿る神の神殿になりました。これが信者なのです。それをどこに使うつもりなのでしょう。だから、すごい価値だと理論的にわかっていても輝かないのです。輝きを失うのです。あー神の神殿、ハレルヤ。それでももう終わりなのです。現場を確認するとき、福音と信者の価値を改めることになります。

1) いのちと死、光と闇、天国と地獄が決まる

福音は何でしょうか。今日の聖書にも少し言及されているように、その福音はいのちなのか死なのかを分

けるものなのです。その間にグレーゾーンというものはありません。人々はグレーゾーンをいっぱい作ります。セクシャリティをジェンダーという言葉を使ってグレーゾーンをいっぱい作るわけです。これが世の働きです。しかし、福音の中にはグレーゾーンがありません。いのちなのか死なのか。光なのか闇なのか。天国なのか地獄なのかが決められるものが福音です。その福音の価値に目覚めることになります。10節から16節の内容を後で読んでみてください。そして、現場を確認することで、信者がどういうものなのか。皆さんは大体が自分のことを外見によって評価することしかよくわかっていません。教会に通っていても、特にレムナントの場合、そういう評価ではいけません。親の大人の方々も全部そういうことで評価するでしょう。だから、嘘をついてはいけません。何で嘘をついちゃいけないのでしょうか。人に迷惑をかけてはいけません。なぜ迷惑をかけてはいけないのでしょうか。もちろん嘘をついて迷惑をかけなさいという意味ではありませんが。教会は違います。なのに、大人の方々が、親の方々が、律法や道徳で子どもを扱うわけです。子供は嘘をつかない、真面目な人間になることが目標ではありません。福音に感謝して、伝道者として残りの生涯を生きて行くその覚悟を決めるレムナントに育てないといけません。勉強しなさい。成績がうまくいかないと怒られるのです。なんで成績によって怒られなければならないのでしょうか。だからといって、レムナントがこの話を聞いて「よし、勉強しなくてもいいんだ」と思うのは、その人のIQが低いからです。しょうがないけれど。そういう意味ではありません。なにが大切な本質なのか。もしかして親の方々もクリスチャンでありながらも、現場が何かもわからない、人の本当の問題も何かわかっていらっしやらないのではないのでしょうか。

2) 恵まれた者、選ばれた者、幸いな者

信者はこの福音の価値がわかったときに、その人の過去がどうであれ、今どんなに惨めな人間であれ、その人は神様に恵まれた人なのです。神様に選ばれた人なのです。だから、幸いな人なのです。これがレムナントの胸に刻まれないといけません。17節から20節の間を読んでみてください。

3) 理由ある者、必要な者、用いられる者、神殿になった者

なので、信者はどれほど価値あるものなのかというと、この世界を世の中を、また2部礼拝で申し上げますが、今の時代を生きる確かな理由ある存在です。この現場に世界に絶対必要なものなのです。そして、必ず神様に用いられる、そのような存在です。なぜそれがわかるかと言いますと、皆さんが見たときには、いろいろな差があるでしょうけれども、神様がご覧になったときには、レムナントひとりひとり、信者ひとりひとり、外見に関係なく聖霊が宿っている神の神殿なのです。だから、生きる理由があります。自分が何のために生きるのかもよくわかってない世の中に必要な者だから、今生かされてるのです。神様は必ず用いられることになります。なぜかという、三位一体の神様が聖霊を通してその人の内側に宿ってともにいらっしやるからです。これが答えです。その人に能力がなくても、能力がないからむしろ良かったのではないのでしょうか。能力があって、その自分の能力で何かができるかのように思うより、全く無能なので聖霊が宿っている、神がともにおられる。だから、その御座の力によってのみ可能なんだ。条件が悪ければ私たちはつい言い訳をして、環境、状況が不利であればついため息をしてしまう、そういう癖があります。これから私たちは、条件が悪いからラッキーなのです。環境、状況がひどいから不可能な状況なのでラッキーなのです。だからこそ本当に聖書にある通りになるチャンスではないのでしょうか。それはあなたがたは知らなくていいよ。あなたがたがいくら無能であれ、周りがあなたがたを迫害して、ローマの植民地であれ、社会から指指される人間であれ関係ないよ。むしろ、だからこそ良かったんだ。Only聖霊が臨まれると。これがクリスチャンです。これが信者の価値です。話を聞いていて、私たちの内側に本当にサタンのやぐらが砕かれていないのだなということに気づかないのですか。いま先生がお話したこれが神のやぐらであって、その反対の条件、状況、環境によって右往左往されることがサタンのやぐらなのです。そういうことがずっと入力されていたので。因果応報という思想が入力されているのです。神を離れているから人間本位なので、そういうルール、法則が生まれるしかありません。それが当たり前になって刻まれてきたわけです。でも今は神様と出会い、聖霊が宿る神の神殿なのです。私は十字架とともに死にました。現場を確認するときに、そこで信者の価値が輝くようになります。

3. 現場を確認すると持続可能なやぐらを建てることを目標にする。

そして最後に、現場を確認したときに、その現場に持続可能な神のやぐらを建てないといけないんだとい

うことに気づいて、それが目標になります。

一回の伝道運動も大切です。受け入れの運動をして終わり、それも悪くありませんが、現場がどういうところなのか確認できた者は、そういうふうには終わります。

1) 霊的戦争、癒しの必要

なぜかと言いますと、現場を確認した人は現場は霊的な戦場なんだということがわかります。その戦場に一回、今みたいにミサイルをポンと落として終わり、ということはありません。それから、現場には救われた人々に救われて終わりではなく癒しが必要なんだということが確認できたので、持続可能なシステムが求められるわけです。本当に現場が確認できている者は。

2) 受け入れの運動

なので、現場において神様が私たちを用いられるときに、まず受け入れの運動を与えられることになります。

3) タラップン運動

受け入れた人々の中で、そこで終わりではなくて持続的にみことばの運動ができる人をピックアップして、定期的にみことばの運動をします。それをタラップンと言います。現場にはそのようなタラップンが必要なんだ。つまり、教会で礼拝を捧げるのではなくて、現場でのみことばの運動が必要だということに気づくようになります。

4) 弟子運動

そして、タラップンの運動をしている中で、そこで神様が備えられた働き手になれるような弟子になれるような人をピックアップして、弟子として整える弟子運動が必要だということに気づきます。弟子はどんな人間なのでしょうか。福音によって自分の人生の答えを出して揺れることがない信仰に立つ者、プラス自分と同じように現場を確認することによって現場に福音が絶対必要なんだ、これこそがメインだという結論を出していて、そのためにその現場のために福音と信者の絶対価値に目覚めて、残りの生涯、福音宣教、伝道に人生の結論を出す者を弟子と言います。このように整えられると、その人が無理しなくても神様が門を開いてくださいます。それを 25 と言います。

5) 地教会運動

それから、その弟子が立てられると、弟子を中心にしてこのようにみなが集まって礼拝を捧げる礼拝堂を中心にしたこの教会ではなくて、その現場に現場の教会が立つようになります。それが目標です。現場の教会は礼拝を捧げるための教会ではなくて、伝道のためのシステムです。つまり、持続可能なやぐらというのは、現場の教会というシステムがしっかり立つことなのです。それを地教会運動と言います。私たちは適当に地域にいるから地教会をしましょうとしてきましたが、それは試行錯誤、いろいろあるからで、これからは正しくやらないといけません。弟子を伝道になる伝道がなっていく弟子、神様が用いられる 25 の答えが見られる弟子を中心にして現場教会が立つということです。つまり、皆さんのいまの住まい、いらっしゃる所々が全部教会に変わることです。まずは皆さんがいらっしゃるその現場の家や場所というのが、みことばの運動、タラップンのための場所に変わること。そこから教会に変わること。もちろんゆくゆくはそれが建物を借りるか買うかになるかもしれませんが、でも原則、建物にこだわるものではありません。あまりにも財産的なものが増えて多くなれば、必要な物以上に多くなれば、後で必ず副作用になるから福音伝道運動にはいらないものなのです。皆さんがいらっしゃるところが教会に。そうか神様、自分の家がタラップンの場所になるように。現場教会の場所になるようにと祈ってください。それを目標にしないといけません。なぜこういういろいろと伝道の働きのタイプが生まれるのかといいますと、現場を知り確認するところなるわけです。現場を知らないとトラクトを配ってもう終わりなのです。ポストにトラクトを全部入れて伝道したということになるわけです。皆さん、自分自身を顧みてもわかるのではないのでしょうか。私たちのように正確な福音を繰り返し聞くにもかかわらず癒されないのに、一回のトラクトで一枚のトラクトでは無理なのです。もちろん悪くありませんが、聖書が教える伝道はそういうもの

ではではありません。現場にしっかりとシステムを立てて、人を癒していかないといけません。継続してみことばを通して癒していかないといけません。これが現場を確認する意味であり、イエス様が 70 人の弟子を現場に遣わされたその理由になるわけです。

現場を確認した場合には、あらゆることがこれから起きます。しかし、諦めることなく落胆することもなく、この目標を失うことなく突き進むことになります。どんなことがあっても目標は揺れることはありません。何があっても。むしろ何かがあるということがこの目標をさらにさらに明確に明確にここにのめり込んでいくようにしてくれるものになるでしょう。これが現場を確認した人の姿になるわけです。ぜひレムナント教会のレムナントを始め、大人の方々に至るまで、現場確認という契約を握って、ぜひその答えが神様によって与えられることを今週 1 週間、体験することを祈りたいと思います。そういう意味で信者にとって現場というのは妥協するところでもなく、逃げるところでもありません。サタンの 12 の罠に溺れている宣教地、霊的戦場であることを覚えて、これを握ってこれから確認しましょう。そして、キリストを持つ信者、自分の価値を改めて、信者、自分の目でまずは関係者、関わっている人々から、また自分が置かれている現場から現場確認をして行く、そういう心構えで祈っていきなと思います。人生がガラリと変わる転換点になるでしょう。この祝福があることを祈りたいと思います。

(祈り)

恵み深い父なる神様。ありがとうございます。イエス様が 70 人の弟子を現場に送って現場を確認することで、残りの生涯どこに向かってどういう風に生きて行くべきなのか、それを教えていらっしゃる場所を通してメッセージをいただきました。ここにいらっしゃる信者ひとりひとりがレムナントを始め、自分の内側を確認して、現場を確認して、福音宣教に結論を出して神様に用いられる伝道者としての残りの生涯を歩いて行けるように、どうか神様、現場を見る目を開いてください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。